

言語に於ける〈意味〉について

——人間学的考察——

両角克夫*

(信州大学文理学部)

緒論

I 言語研究の課題

言語は心の窓であり、心と心をつなぐ通路である。人類が言語を作り出し得なかつたならば、今日在る如き人類の社会と文化は到底見られなかつたであろう。時間的空間的に隔てられた人間存在を結ぶ媒介として、又個人の浮動的な意識内容を整理し、多様な経験内容を概念又は知識として固定し、これを記憶に貯え、新たなる判断と思考を押し進める媒介として、言語の機能に及ぶものは他にあるまい。かかる言語は人間の歴史とは切り離して考えられないものであつて、人間の宗教的、哲学的自覚の過程に於て当然人間の深い関心の対象であり、学問的考察の対象にまで発展せざるを得ないものであつた。例えば、旧約：創世記Ⅻ(1—9)に於て、言語の混乱が如何に人間社会を分裂に導くかが語られ、又ギリシヤに於ては、λόγοςなる言葉は〈見せる〉の意にもとずき、プラトンは、思惟(διάνοια)と言語(λόγος)とを同一視し、ただ思惟は心が心自身となす音声を伴わぬ対話と考え、アリストテレスは言語をば〈外のロゴス〉、思惟を〈心の内なるロゴス〉とした。又ヘラクレイトスに於てはロゴスは宇宙の秩序であつた。ロゴスは理性であると同時に宇宙法則であり又この二つを媒介する認識であり知識でもあつた。

かかるロゴスは、ギリシヤ哲学との接触に於て形成されて来たヘブライズムの神学に於て更に特殊化された。例えば、新約：ヨハネ福音書の冒頭に於てそれが見られる。

これらの例は、人間の認識形成の過程に於て、又人間社会の絆として、言語の果す役割が如何に重要であるかを物語るものであり、同時に、人間の知的関心の根源が世界を通して自己を知り、自己を通して世界を知ることには在る以上、言語研究の課題は〈言語とは何か〉と問うことによつて〈人間とは何か〉という問題の次元にまで深められ統一されていく筈である。

従つて言語研究に於ける新たなる成果は、〈人間とは何か〉という問題に新たなる光を投げることになり、又逆に新たなる人間観、社会観は言語研究に新たなる場面を開く筈である。言語研究の課題と意義は、まさに実証的な特殊科学として、多様にして流動そのものの言語現象の記述を通して、言語の本態を了解し、人間としての自己了解を深めていくことに他ならぬ。

* 信州大学助教授

Ⅱ 言語研究の方法

方法とは、主体が対象に迫る道筋であり、素材と目的とを媒介するものである。従つて方法は素材としての対象に規定されると同時に主体の行為を方向づける目的によつて規定される。

科学としての言語研究の直接の目標は、多様にして流動的な言語現象を記述し、その構造を分析し、言語の本質を普遍的な形に於て表現することであろう。然し現象は余りに多様であり、これを記述し分析する場合にもそこに何らかの一定した道筋を採用しなくてはならぬ。即ち何らかの方法を定めることなくして現象を捉え研究の対象とすることは出来ない。そして如何なる方法をとるにしても、その方法はそれ自身の限界をもち相対的であつて、素材の一面に光をあてて対象を浮びあがらせることになる。こうした光の源は研究主体の立場であり、言語観である。かかる言語観は言語現象の観察と分析とによつて育てられ矯正されるものであるが、その中核には必ず主体の言語体験と言語生活があり、言語現象は主体の外に在ると同時に内に在るものである。夫々の国語の syntax や accidence は歴史社会的に定められ伝承されて来た所のその社会特定の客観的共通的な制約 (convention) であるが、この制約は、外的原因 (例えば英国に於ける 1066 年の Norman Conquest) や内的原因 (例えば英国に於ける 1611 年の Authorized Version の成立、フランス 17 世紀古典派に於ける Malherbe その他の詩人批評家の努力など) によつて崩壊或は設立されるものであつた。言語は或る地域、或る時代に於ける特定の社会に於て客観的な一定の制約をもつと同時に、個人に対して極めて広大な創造の領域を残している。言語は自然とは異り、人間が或る目的と必要とによつて作り出して来たものであり、伝達こそがその主要な目的であつたが故に、人類に於ける最も共通的な論理的制約と特殊な歴史社会的習慣による制約とを、表現と伝達の形式又は方法に於て必要としたと同時に、表現伝達の内容である言語主体の心理内容によつて、言語の客観的制約も無限に色づけられ、その柔軟性を示して来た。つまり言語に於ける客観的制約や形式は、主観的心理的内容に密着し、互に作用し合い規定し合つていのである。言語活動の本質は、特殊な体験と心理の内容を社会共通の言語形式に結びつけて表現し伝達せんとするものである。然し論理的な規範が無色な純形式的なものであるのに反して、国語としての歴史社会的制約は、その言語主体である国民又は民族の特殊な生活体験に於て形成され来たものであり、その言語形式はその言語主体の特殊な世界観を反映していると云えよう。即ちその言語の特殊な制約や構造は、特殊な物の見方、考え方に密着している筈である。

Saussure は、自らの言語学を建設するに當つて、言語活動の社会的制約としての客観的外的な面を langue なる概念で、又その主体的個人的内面を parole なる概念で捉え、langue と parole の二つの言語研究の分野を想定したことは画期的な考えであつたと云わなくてはならぬ。ただ Saussure に於ては、彼が自らの言語研究の対象としてとりあげた langue なるものが実体化され、主体と客体、個と社会の相互関係に於て具體動的に捉えられず、langue を対象化する過程に於けるその抽象性が問われるであろう。言語活動を、langue と parole の二つの面に識別した彼の分析力は偉大であつた

が、parole に関しては Bally その他の弟子達にその仕事を残し、言語の中核をなす意味の問題には殆んど触れず、langue と parole との具体的統一の仕事を残した。

言語活動そのものが動きであり、そこでは主体と客体、内容と形式がある状況に於て互に絡み合い有機的統一をなしつつ歴史に於て段階を経て変化していくことは他のあらゆる文化現象の場合と等しい。然し我々は動いているものを直接に捉えることは殆んど不可能である。動いているものの姿を明瞭にするためには、いくつもの時間の断面を作り、静止の状態に於てそれらの構造を露呈し、夫々の構造を記述分析し、これらを同時性即ち没時間性の地平に於て比較考察することによって様々な時間の段階に於て変化するものと恒常的なもの、言語に於ける普遍的なものと同様なものを識別出来るのである。変化に於ける法則はやはり継起的時間の幾段階かの断面の比較によって見出されるものであり、学としての言語研究がかかる法則的なものを旨とするのは必然的なことであろう。ここには Saussure が厳しく区分した *linguistique synchronique* と *linguistique diachronique* との交叉が見られる。

動いている言語活動を一旦静止させ、その瞬間に於ける断面を露呈することによつてこそ、構造を記述分析出来るのであるが、唯この場合、その構造をあくまで有機的機能を担う統一体として捉えるべきであつて、分析の結果見出される原子的な要素、例えば *phoneme*, *morpheme*, *semanteme* の如きものの機械的集合によつて構成されると考えることは言語活動の生態を具体的に捉えることにはならぬ。言語に於ける構造はどこまでも機能的有機構造であり、そこに目的論的価値的考察を導入せざるを得ない。これは言語学の対象が、自然科学に於ける如く没価値的存在として人間の外に与えられるのと異り、言語は人間そのものの目的行為の過程であり結果である故に、全くの没価値的考察を不可能にするからである。ここには、自然と人間社会を母体とする文化との根本的な相違があり、言語研究は自然科学に於けるとは異つた、或はより複雑な方法を要求されるであろう。ここに言語学が人間の学との連関に於て進められなくてはならぬ理由があり、言語行為が主体的行為である以上、言語学は人間自らを対象化しなくてはならぬ面を有し、そこに言語学の方法上の困難さがある。従つて、単なる実証的な言語経験の集積からは生れて来ない一つの想定又は立場、即ち言語観によつて研究の方法が規定され方向づけられるのである。

私は言語をば人間の目的行為の過程であり結果であるとし、言語活動の顕現にあつてこれを具象化する要因を、論理的、歴史社会的、個人心理的に捉え、これを類と種と個の概念に対応させつつ、これらのものが言語表現の形成に於て如何に互に滲透し合い互に他を否定的に媒介し合うかを観たいのである。

言語行為は人間が自己の思想、感情を概念化しこれを音声又は文字として客体化すること、即ち表現することによつて他人に自らの意向を伝達することであり、その目的の最大なるものは伝達である。従つて言語行為は伝達という社会行為の一つである。伝達の方法は言語以外に多くのものがあるのは勿論であるが、言語による伝達の特質の主なるものは、その過程に於て概念化を必要とすることであり、音声や文字は言語にとつて本質的なものとは云えない。何故ならば、音楽に於いては、言語以上に音そのものによ

つて直接に人間の心理内容が伝達され得るのであり、図解や絵画によつて文字以上に直接に事象を伝達し得るからである。従つて言語の本質としては、伝達の媒介として音声や文字を用いる以前の段階、即ち概念化の内的過程こそ考察されるべきである。主体の意向や関心が概念化される過程を意味作用と呼ぶならば、言語に於ける意味こそ言語研究に於ける最大なる関心の対象をなすものであろう。従つて、onomatopoeia など特殊なものを除き、意味と音声或は文字との結合は、必然ではなく偶然であり、各国語の歴史社会的な特殊事情にもとづく（但し、文学作品などに於ける場合は、概念と音声又は文字との間に交響的美的必然性の計算がなされているから別個に考慮されなくてはならぬ）。従つて我々は自己の伝達内容を概念化しこれを体系化した時に於ては、言語行為の主要な過程を通過したと云うべく、概念化、即ち広義での思惟なくして言語はない。この場合勿論、概念化や思惟作用は音声又は文字の体系として記憶に貯えられたもの、即ち或る特定の国語を媒介としてなされるのである。

思惟はその内容として個人の意志や感情を含むものであるが、その伝達形式としては普遍的制約によらなくてはならぬ。その形式を論理と呼ぶなら、その内容は社会的個人的心理であり、この形式と内容とが歴史的な夫々特殊な状況に於て結びつき顕現して来たものが現存の諸国語である。

言語がその伝達の目的を果したかどうかは相手に理解されたかどうかと云うことであり、つまり話し手の意向が概念的意味を介して相手に把握されたかどうかである。従つて言語の理解とは、音声又は文字に代置されている概念の内包と外延を明確にし、各概念間の相互関係を捉えることによつて、話し手の意向を了解することである。これが言語に於ける意味の了解である。言語の考察は意味の考察を離れてはあり得ない。意味作用は諸国語に於ける音韻体系の差別以前の一般的言語行為である。意味こそ、素材と音声又は文字との中間にあつて、これを統一し主体の意向に結びつけるものである。

私は、この小論文に於て意味の面から言語の本質に接近してみたかつたのであり、第一篇に於ては意味の成立を通して言語の存在を内側からあらわにせんと試み、第二篇に於ては価値的見地から言語表現の特質を考察することによつて、意味の美学の可能性を探つて見たいのである。

第一篇 意味の形成

I 意味の意味

言語行為は音声又は文字によつて意味を表現伝達するものと考えることが出来るが、それでは意味とは何であろうか。

言語表現に於ける意味には二つの段階が考えられる。一つは出来上つたものとして言語主体から離れた単語や例文に関するもので、例えば辞典や文法書に於て見られるものの意味である。それらの語句は限定された概念の意味を内包しているが、それによつて誰が誰に対して何に関して語りかけているかという、相連関した統一場に於て成立する主体に関する意味、即ち意向内容は不明瞭である。後者がむしろ意味作用の根源であり実際の言語行為に於ける中核であつて、語句の意味に生命とその方向を与えるものであ

る。我々は、不慣れな外国語とか古文に於いて、辞典に於ける語句の意味を手がかりとして作者の意向を捉えることを余儀なくされるのであるが、母国語などに於ては、むしろ直観的に相手の意向が大体理解されて後、各部分の語句の意味も明瞭になる。辞典などに与えられている《意味》は、その語句の代表する概念の内包を限定し（定義）、その外延を明瞭にする（分類）ものである。言語主体の志向内容を意味する場合の《意味》は、言語表現として客体化されたものの中に於ける言語主体の在り方である。

Saussure の用語を借りるならば、辞典などに於ける語句の意味は langue に関するものであり、それは必然的に多義的であるが、主体に関する意味は parole に関するものであつて、そこに於ける単語や文章の意味は、主体の志向の周辺に結晶し、その context その situation に於て一面きりの独自の表情を示すものであり、ここでは単語も文章も方向と統一をもつ文脈としての全体の中で自らの意味を獲得するのである。parole に於ては、全体が構成要素としての部分を規制するのである。

意味の意とは、音と心との合字であり、心が音に於て自らを顕現したものであり、英語の meaning, 独語の Meinung は、ともに mean, meinen なる動詞、即ち意図する、志向するから来ている。又仏語に於ける、《Qu'est-ce que cela veut dire ?》などに於ける vouloir dire なる表現がこれにあたるものである。従来 semantics と呼ばれて来たものは、meaning よりはむしろ significance、即ちその語源をなす sign（記号）とその裏面をなす概念、及びその概念に対応する事象的存在などの相互連関を考察することにその中心があつたが、私は言語現象に於ける記号、即ち音声や文字は夫々の概念と連合関係を有すると同時に、それらの概念と音韻の体系を介して人間の自己了解の仕方が露呈しているものと考え、そこに言語に於ける意味の根源を探りたいのである。

Ⅱ 意味成立の条件

《君の云うことは意味がない (nonsense)》

《彼は意味ありげに語つた》

などに於ける《意味》を中心にして、それが言語に於てどのようにして成立するかを考えてみたい。

かかる意味とは主体との関わりにその源を発する。関わりとは、inter-esse（間に在る、参加する）の意味であり、志向であり、Heidegger の用語を借りるならば Sorge である。人間の行為はすべて客体との何らかの関わりに発するのであり、客体は主体の関心の対象となる限りに於てのみ意味をもつて来る。自然物に於ても、路傍の岩石は意味を持たないが、鉱物研究室の岩石は多大の意味をもつ。《豚に真珠》、《猫に小判》も主体との関わりのない存在の無意味さを示す興味ある文句である。然し言語は、自然物と異り、人間の行為によるものであるから、言語行為そのものがその主体の関心の在り方を露呈することに他ならぬ。又言語活動の結果として、歴史社会的に形成されて来た言語習慣や制約 (convention) にはすでに人間の関心の姿が潜んでいる。どんな単語一つとつても、そこには人間内部の反映を見ることが出来よう。これは、自然と文化との領域を区分する一つの基準でもある。

このような主体の関心に発する言語行為は、それが外に出される (express) 時、相手への伝達 (communication) の目的を果さなくてはならぬ。言語行為は具体的には必ず「誰かが何かについて誰かに語りかける」ものであり、即ち主体の関心は、話題と聴き手に対するものであつて、その構造は二重である。語りかけるということは、関心を他の主体と共にしようとする社会的行為であつて、言語 (λόγος) の真の姿は対話 (διάλογος) に於てこそ見られるのである。即ち話すということは、そこに必ず有形、無形の自己否定にまで至る矛盾と問いを含み、相手の何らかの反応を期待しているのであつて、言語の理解とは、語られている問題の所在を捉えることに始る。言語行為は本質的に重層的に進展していくやりとりの行為であつて、独白や日記の場合に於てさえ、自己の中に汝としての自己を設定しているのである。soliloquia は私との対話に外ならない (cf. Augustinus)。ここに於て、主体の関心に発する言語行為が伝達である限り、他の主体との関わり、即ち社会性を要求されるのは当然である。ここに個人的ものが歴史社会的制約を受けることになり、この社会的制約は更に普遍的思惟の法則、即ち論理に制約される。言語に於ける制約は二重であつて、後天的習慣と契約とによる歴史社会的集団のそれ、即ち諸国語の間の種差 (specific difference) として理解されるものと、先験的要素を含む類的普遍的ともいふべき論理的規範、即ち言語活動そのものの根柢にあるものとである。従つて、言語行為がその伝達の目的を遂げるためには直接的な心理表出ではなく、必ず特殊な国語としての制約と論理的規範を経た客観性を要求されるのである。だから個人は激しい学習と訓練の過程を経て初めてその言語をものにし、自己の言葉としての表現の自由を習得出来るのである。一つの言語を自分のものとするということは、換言すればその社会の集団に参加することによつて集団の中の個としての己の地位を確立することであり、即ちその集団に於ける言語主体を分有することである。従つてここに言語の価値基準の如きものを考えるとすれば、個人的な深い関心に発した意味内容が、どれだけ普遍的客観的に、特定の国語の制約の中に於て己を明確に客体化しているかということである。

明確であるということは伝達の範囲を拡大することであり、自己の「云いたいこと」に対して整理と吟味を加えることでもある。高踏を装う以心伝心、不立文字、問答無用、というような思想は、合理性を排し発展性を喪失した閉鎖社会の投影である。話し合うということは、解放された公開の場に於ける真理探究の共同作業を意味するものであり、ここには Socrates, Platon に於ける対話の意味があり、ギリシャに於ける合理的学問的精神が潜む。

言語表現に於ける意味の濃度は主体的関心の濃度であり、その意味の伝播性は主体的関心の社会性と言語習得の度合に依っている。言語表現は決して自然発生的な直接行為でなく、後天的な学習による目的行為であつて、その内部に於ては、記憶と知性と意志或は表象と判断と感情とが互に絡み合つて統一されているのである。

以上、私は言語行為が意味伝達の行為であつて、その意味の成立する条件として、話し手と聴き手が話題に対して関心を共にする場面を想定したのであり、言語に於ける意味は、言語主体の話題と相手とに対する二重の関心の構造をもつことを明かにした。

然しこの場合の意味、即ち言葉は、キャッチボールの如くやりとりされる過程に於て存在するのであつて、やりとりの度毎に言葉は新たなる意味をつけ加え、無限に発展していく。又言語の流通する場を考えると、その言語習慣を共有する社会の領域全般であり、その言語圏は共通な文化圏によつて裏づけされている。言語は単なる伝達的手段として無色な、記号的なものではなくして、それ自身その集団の物の観方、考え方、及至世界観を反映するものであり、そこにはその集団社会の性格（エートス）即ちその文化が反映している。

又言語は生産され、流通し、消費され、再生産されていく。生産された当時は具体的で簡単な唯一つの事象を表していた言葉も、それが流通し、消費又は理解され、再生産される場合には更に新たなる意味をつけ加え、或は抽象化されて、二重三重の意味を帯びてくる。例えば sub-ject（下に投げ込む）という言葉の意味を辞典でたどる時再生産されていくこの言葉の意味は大麥面白いものである。そこには人間の思想の歴史をさえ読みとることが出来よう。

結局言語に於ける意味は、その場に於て色づけられ限定されるのであり、背後にその言葉の根源をなす同一性（identity）を潜ませながらも、無限に変容していく。場とは全体としての個性を強くもつ統一体であり、話し手も聴き手も話題も、又言語手段も、その場の極点（limit-point）として働くのであつて、原子論的な構成単位として、即ち孤立した質点（material point）として働くのではない。しかもこの場の構造は空間的な広りを有すると同時に時間に於て積み重ねられていく。然し場は平面であつて、歴史的な累積も現在としての場面に於てのみ同時的に顕現し得るのである。つまり言語活動には何時も現在があるだけであつて、瞬間的に過ぎ去る場面が連続しているに過ぎない。ここに、現在の平面としての場が、過去の総決算の場であると同時に未来に対して新たなる創造の場としての意味をもつて来る。つまり言語は、*ἐνέργεια*（現勢）としての現在の場面に於て、*ἔργον*（成果）としての過去の面と *δύναμις*（潜勢）としての未来の面とが相接するのである。

以上、私は言語表現に於ける意味を主体の側から関心として捉え、これの構造を考察したのであるが、次に言語表現に於ける文と語とに於て、言語活動の在り方を探つてみたい。

Ⅲ 文と語

我々の話したいこと、伝えたいことは最初の段階に於ては覆われており、曖昧で漠然としている。知覚、記憶、想像などが混在しているにすぎない。その場合の表象は個体的のものであつて、互に連絡もなくばらばらである。これらの表象は統覚作用によつて記憶として貯えられている過去の経験の中に位置づけられ、反省と思考によつて分解されて、既知の概念によつて命名されることになる。この概念は各国語の制約の下で音韻の体系として現象化される時、はじめて我々の話したいこと即ち意味が明瞭となり、伝達が可能となる。即ち、言語に於ける意味の顕現は、まず事象の命名とその統語法的排列を要請する。

語は言語活動の場に於ては、辞典に於ける如く孤立存在ではなく、主体との関わりに

於て、意味系列に於て、即ち所謂《文》に於てその機能を果している。語が統語法的に集つて文を形成するのでなく、初めに統一ある全体としての意味があつて、それが分化したものが語である。勿論一語が文をなす場合もあり得るが、前置詞、接続詞、などに限らず、すべての語群は程度の差は認めるとしても共義的 (synsemantisch) であると云えよう。従つて品詞の分類や語の意味は文脈 (context) に於てのみ具体的に決定されるのである。然し発生的に考えるならば、言語活動はまず特定の事象に名を与えることに出発したと云えよう。最初の名詞は殆んど固有名詞に近かつたに相違ない。固有名詞が概念として内包をもつか否かは、言語活動の場に於て決定される筈であるが、内包をもつとすればそれは未分化の極めて直観的のものであり、これが思考或は判断の作用によつて分析され、その本質的屬性が抽象され、類化されて、語として固定したものが名辞 (term) である。名辞としての語は我々の経験や印象を普遍的にして要を得たる《知識》として意識の内部に貯えるのに重要な役割を果す。かかる substance に対応する名辞は、第一実体としての個体から第二実体としての種や類にその外延を増加しつつ己を抽象化し、終には実体を全く離れてその屬性のみを表す形容詞、副詞等に移行し、そのような実体的なものの時間に於ける在り方、相互關係等を示すものとして動詞が要求されて来る。(但し、英語の《to be》にあたる動詞は大い全く論理的無時間的結合詞であり、接続詞、前置詞などと等しい。) 動詞に於ても、自動詞としてあつたものが、分裂して他動詞と目的に、又主語と結びついていたものが、主語、動詞、と分化して来たのではないか。例えばラテン語の cogito, sum, の如く人称語尾変化を保存しているものはそれを物語るとも云えよう。(勿論これは論理的考察であつて歴史的考察によつて実証的裏づけを求めなくてはならぬことは自明である。) 又動詞に関する時制 (tense) が定つた形をとつて来たのは、主体の経験内容をその継起の序列に於て整理し、これを誤解なく相手に伝達するために約束されたものであり、敘法 (mood) は、言語表現に臨む場合の主体の心理的在り方を示す必要によつて作られて来たものと考えられる。以上の如く、語の形式、時制、敘法、その他統語法的制約は皆、全体としてのある目的につらなるものであり、その通時的、共時的いずれの考察に於ても目的論的に説明出来るものである。言語発達の必然性と、その構造の組織は、外的な機械的因果關係ではなく、又上部構造でもなく、人間の自己表現と伝達の目的につらなるものでありそれは又文化価値創造過程の一部面として取扱われるべきものである。どんな一つの単語に於ても、我々はその語を作り語り合つた集団の文化創造活動の反映を見得る筈であり、その意味で言語は集団共同制作による芸術作品とも云えるであろう。従つて意味を表現し伝達せんとすることは、価値実現の行為の一姿容に外ならないのである。

Ⅳ 意味と形象

言語は表現に於ける様々な形式上の制約をもっている。この制約は言語主体の学習の不足により、感情による心理的混乱により、破られることが多いが、それは言語行為に於ける未熟さであり、意味の形象化の失敗を示すものである。然し作家が言語を自己のものとして後に、その形式上の制約を越えて新たなる言語形象の創造の領域に出ようとする場合は別である。これは従来散文よりは詩に於て多く見られたが、例えば Joyce に

よる《Ulysses》及びそれ以後の作品の如きは英散文に於けるその種の大きな実験の一つであつた。作家の仕事は言語の新たなる伝達の領域を拡大し、新たなる表現の典型を形象化することであり、個の内部にあるものを、言語に於て完全に客体化することである。これは、T. S. Eliotがその《Hamlet論》に於て用いた《objective correlative》なる用語に相当し、G. Flaubertに於ける《mot juste》の努力がそれである。言語に於ける論理的規範、歴史社会的制約等の正しい在り方は、言語主体の目的をとげさせるのに役立つ生産的のものたるべきであり、そのような規範と制約は文法であれ修辭法であれ、存在理由をもつ。然し、そのような規範と制約を生産的たらしめるのは言語主体の努力に他ならぬ。

私は緒論に於て、言語研究の目的が《言語とは何か》を了解することであり、それは人間の自己了解につながることを述べたが、更に一步を進めて、《言語とは何か》は《言語は如何にあるべきか》に結びつく筈であり、言語の現象学から存在論を経て価値論に通ずる路が明白にされる。この言語価値論は、文体論、言語美学などの領域で取扱わるべきものであり、私はこれを意味の美学として考えたい。

言語行為の目標は表現であり伝達であるが、どんな意味を如何にして表現伝達するかによつて言語表現の形が変るのであり、科学に於ける又文学に於けるその内容と形式は異つた目標をもっているのであつて、夫々の目標に適合した方法が採用されるべきである。科学に於ては言語は全く論理的規範に服すべきであり、この点、言語はその浮動性の故に伝達の不明確さを招き易く、精密な論理的記述には数字その他の全く限定された記号が作られなくてはならぬ必然性があつた。記号論理学の必要性は言語表現の論理的不完全さから来ている。他方、文学作品の目標は、美を又は精神的愉びを言語に於て形象化すること、即ち言語に於て美的感銘を再び喚起出来る等価物 (equivalent) を形成することであり、本来的に概念的思惟的である言語が如何にして感性的なものを媒介し得るか、そこには音楽や絵画とは異つた言語独自の美的領域がある筈であり、言語行為に於て、如何なる関心の思考的概念的展開の在り方が美的であるかと云う問題に面接するのである。

(未完)

Synopsis**Meaning in Language****Katuo MOROZUMI***

(Department of English Literature, Faculty of Liberal Arts and Science.)

In this essay I want to understand language from the side of meaning which is the hidden core of speech. Meaning must be realized or embodied in sounds or letters in order to be communicated to others. The main aim of language is "communication" which is essentially social.

What is the meaning of meaning? To mean is to intend. What makes man intend is interest or concern. So, to inquire into "meaning" is to inquire into humanity itself. Through language and speech we can know what man is. And we can know language and speech well through humanity. So my method is anthropological.

This essay falls into two parts, (I) phenomenology of meaning and (II) esthetics of meaning. Meaning must be studied in a certain concrete situation, where "the whole is prior to the part". The structure of meaning in language cannot be reduced to its first elements. From this point of view the making of words and sentences is considered. And next the relation between meaning and style is clarified.